2013
Vol.20
Mar

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／小 川 良 太

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874

神戸で再開（六甲植樹地にて）

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2 「緑」の道は調和の道
P.3 蘭州市職員と六甲山にて共同植樹
P.3 日中緑化活動10周年記念シンポジウム
P.3 オトカ前旗植樹
P.4 庭木の健康診断９　－気象害－
P.4 絵本からのエコ・メッセージ16
P.5 黄土高原の植物19
P.6 第２回 ＫＦＧ歴史散歩より
P.6 平成12年度植樹ツアー顛末

～日中緑化活動10周年記念シンポジウム講演より～

「緑」の道は調和の道

神戸大学国際文化学部教授　王　柯

蘭州を四回訪問したことがある。最初に訪れたのは1987年の秋だった。当時、中国政府文化省に務めていたわたしは、中国最初の「文化の日」の「西北分会場」が設けられた蘭州で複数のイベントに参加していた。「文化の日」を通じて、中国文化を理解するためには、この地域にあった黄河文明を理解しなければならないと感銘を受けた。当時、石油精錬工場による大気汚染問題がすでに注目されはじめていたが、それでも蘭州の青空は印象的であった。

2002年、すでに日本の大学で教鞭をとっていた私は、アメリカで起こった同時多発テロ事件（9.11事件）が中国のイスラーム社会にどんな影響を与えたかについて調査するため、中国西北部のイスラーム社会でフィールド・ワークをした。その旅において、甘粛省とくに蘭州の環境の悪化を実感し、また研究者としてその理由についても考えざるをえなかった。ある県では樹木がほとんど見られず、しかしどのモスクも立派に作られ、昔の回族軍閥の邸宅も巨木でできていた。蘭州への帰途、市街地が塵に包まれ、乗っていた車が空気の澄んだ郊外からまさにその塵の球へと突っ込んでいくような恐ろしい光景を目にした。人間の営みによって、環境がますます悪化したことを体で実感した。

2007年に「中国全国日本語スピーチコンテスト」西北ブロックの審査委員長を務めるため三度目の蘭州を訪れた。空港から市内へ向かう途中、ほとんどの禿山が黄河の水を使って緑化され、「退耕還林」が着実に実行されていることは分かった。しかし蘭州大学の友人と黄河の畔を訪れたとき、目が眩しくて涙が止まらず、それは酸素が薄いためと説明された。最近の蘭州訪問は2012年８月のことである。空気が悪い都市として相変わらずノミネートされているが、太陽の丸い姿を見ることができた。空気の質が着実に改善されている。これが、すべて「黄河の森緑化ネットワーク」のお陰であるとは言えないまでも、中日両国民衆による緑化活動が水の泡にはならなかった証拠であった。

「黄河の森緑化ネットワーク」の地道な活動は、様々な意義を持つものに違いない。蘭州は中国の西北部にあり、周知のように、この地域の自然環境は極めて厳しい。緑の減少につれて砂漠化が進み、人材が流出するため経済の発展が遅れ、経済的に豊かではない住民たちがさらに自然と戦う、というような悪循環が以前から起きていた。こうした環境の悪化がもたらした影響は決して地域社会、ひいては中国に留まるものではなかった。毎年日本にも飛んでくる黄砂は、この地域から来たものもある。環境の悪化から始まったこの悪循環を絶つために、緑を取り戻す緑化活動は、どうしても必要なものであった。環境問題がすでに国境を超える問題となった今日、「黄河の森緑化ネットワーク」の活動は、まずこの点において評価しなければならない。

自然との調和だけではなく、人間社会の調和の実現に対して、「黄河の森緑化ネットワーク」の活動は大きく貢献している。国境を超える民衆の交流とネットワークを形成していることは、東アジア地域の平和にも寄与するものである。今日、日中間の対立・対抗関係によって東アジア地域の平和が大きく脅かされていることは決して杞人之憂ではない。ナショナリズムを解消する方法は戦争ではないのだ。むしろ、戦争が起こればナショナリズムが一段と高揚し、東アジア地域社会はさらにナショナリズムの悪循環に陥る。最近の両国関係からも分かるように、政府主導型の国際交流だけでは、日中両国の間に横たわっているナショナリズムの芽を摘むことができない。ここでもっとも重要なのは、政府による国際的外交より、むしろ民衆間による民際的交流である。人間と自然との調和を取り戻すような崇高な目標の下で協力しあうことは、両国民衆を、恨みを扇動する政治から離れさせ、相互認識、相互好感、相互信頼を深める良い方法であることに違いない。

こうしたネットワークはなぜ形成できたのか。その大きな理由は、本来「国境」の意識が薄い華僑華人が「黄河の森緑化ネットワーク」に参加し、活躍していることと考えられる。神戸華僑華人社会の持つひとつの大きな特質は、公共性を重視することであり、それは、林同春、石嘉成のような公共性を重視する優秀なリーダー（華僑領袖）が存在するためであった。公共性とは、広く社会一般の利害にかかわる性質である。これらのリーダーに導かれて、神戸華僑は、常に参加者全員、そして社会全体に利益をもたらすことを考えて様々なアクションを起こしていた。そのため、神戸の華僑華人は日本人社会と良好な関係を築き、地域社会の調和と経済発展を促進する重要な力となった。「黄河の森緑化ネットワーク」は、まさにこのような国境・国籍の垣根を低くする一つの「公共」的空間であり、緑を取り戻すことを通じて自然との調和、人間社会の調和を実現する道であった。

蘭州市職員と六甲山にて共同植樹

２月13日の夕刻春節の賑わいの神戸に、張志勇副指揮・王万鵬処長・朱恭工程師の三人が到着しました。中国での活動開始10周年行事が中止になり、来日が延期されていたものが実現の運びとなりました。王・朱の両氏は事業開始時から植樹を共にしてきた、文字通り「老朋友」です。会員の中には一緒に苗を植えた記憶の方もおられることでしょう。

14日は朝から六甲植樹地にて共同植樹に参加。急な呼びかけにも係わらず、姫路からのご夫妻も含めて13名の会員が参加しました。３人は長旅の疲れも見せずに、スコップを手にサクラ・モミジ等の苗を植えました。2006年、前回の訪問団が植えたサクラは既に大きく成長していますが、花の季節には少し早かったのが残念でした。

午後は六甲山にて日本の緑を満喫しました。夕刻からは会員有志による歓迎宴を催し旧交を温めました。一行は関西を見学した後、17日に神戸を離れました。

「桜を植える張・王氏」

スコップを手にし土・空気に触れ、日本の自然を実感した三人は「緑の濃さと、樹木の種類の多さ・空気すがすがしさ」が印象的だったとのことです。

日中緑化活動10周年記念シンポジウム

11月３日神戸市内で日中緑化活動10周年記念シンポジウムを開催しました。昨年は蘭州市で活動を開始して10年の節目の年に当たることから、日中両国で記念シンポジウムの開催を予定していたところが、日中間紛争の影響を受け中国内の事業は中止となりました。一方日本国内での開催については議論もありましたが、市民レベルの交流は続けるべきだとの考えで予定通り開催しました。

当日は神戸大学国際文化部の王柯教授・ＫＦＧ徳岡正三顧問両氏に講演をいただきました。最後に神戸華僑総会伽華芸民間舞踏隊による中国舞踏を鑑賞しました。

王柯教授は日中両国において民族問題をテーマとして研究をしておられます。民族問題は政治・経済・宗教などが複雑に入り組んだものであるので、多面的・重層的な研究が必要とされるようです。今回はご自身の蘭州市訪問の体験も交え、自然環境と人間社会の関連の重要性に言及された。最後に、日本人社会と華僑社会が良好な関係にある神戸の団体としてモデルとなるような活動をとの提言をいただいた。

徳岡顧問からは「水と緑、そして緑化の副作用」と題して、近年の黄河断流・黄土台地の緑化地域における崖面崩壊は緑化による灌漑水との関連性が指摘されているとのお話であった。また、新たに取り組んでいるオトカの地では、日本人がイメージしがちな高木による植樹を目指すと逆に地域の水分バランスを壊し、環境の破壊を招くので細心の注意がいるとのことでした。

オトカ前旗の植樹

2011年から取り組んでいる内蒙古自治区オトカ前旗フルス村での植樹活動は、11月末日に２年目の事業完了報告を日中緑化交流基金に提出しました。

フルス村の年間降水量は250㎜と日本と比較すると約６分の１の寡雨地帯です。そして、しばしば強風が吹き流動沙地が拡がり、風砂の被害を受ける半農半牧地帯です。しかし、地下水位の高い地域が多くあり、植栽した木々の活着率はたかくなることが期待できます。

2012年３月に事務局長以下３名が現地に赴き、２年目の事業の進め方などを協議し活動を始めました。植栽に当たっては風砂の被害を避けるために、風向や砂丘上の位置を慎重に見極めて植栽地を選定しました。最初に風砂を抑制することを目的に沙障(防風防砂用の柵)を設置し、沙柳(日本名スナヤナギ)と楊柴（日本名ヒツジシバ）を一定間隔で同列状に混交植栽しました。これらの木々が成長したあかつきには防風固砂林となることが期待できます。植栽面積は33,5haになり、沙柳と楊柴をそれぞれ95000株を植栽しました。植栽した木々は９月には新しい枝葉が伸び出し、大きく育ち始めています。

成長する楊柴

成長する沙柳

この植栽した木々は将来防風固砂林として土地を改善することを期待されますが、この２年間に植えた木々はまだその効果を発揮するには至っていません。しかし近い将来には風砂の被害を軽減すると共に、飼料や燃材としての収穫もできるようになるものと考えられます。

私と環境(17) 庭木の健康診断 ⑨

樹木環境研究会議「ミルフィーユの会」
天野孝之

― 気象害 ―

基本的に植物は、日照量と気温によってその生育場所が限定されます。庭木も例外はありません。最近よく植えられるハナミズキ等の花木は、日当たりのいい、家の南側に植栽するのが基本です。花木に限らず多くの庭木は日当たりを好みます。しかし日蔭を好む庭木もあり、それぞれの庭木の性質をよく理解して植え場所を決める必要があります。日蔭を好む庭木は、アオキ、ヤツデ、センリョウ、マンリョウ、ジサイ等があります。これらの庭木を日当たりのよい場所に植栽すると、真夏のカンカン照りの時には「葉焼け」と称する葉が枯れこんでくることがよくあります。家の北側あるいは大きな庭木の下の日当たりの悪ところに斑入りのアオキを植えこむと、黄色い斑入りの葉が際立って目立ち、また秋から冬にかけては真っ赤な実が付きますので、暗い庭に何かほのぼのとしたものを感じます。余談ですが、アオキには雄の木、雌の木があり、実をつけるのは雌の木です。植える時には雌雄を確認して植栽してください。雄雌別々の樹木は、イチョウ、ヤマモモ、モチノキ等多くあります。確認といっても花か実を確認するしかありませんが。ツバキ、カエデの仲間は、日陰でも耐えて生育する耐陰性の強い庭木です。日当たりを好みますが、日当たりの良い庭でしか生育しないというものではありません。アセビ、ソヨゴ、モッコク、カクレミノ、イヌマキ、ヤマブキ、シャクナゲ、ヒイラギナンテン、ナンテン等があります。日当たりを好む庭木でも、ハナミズキ等の葉の薄い庭木は、葉焼けを起こしやすいです。

北側の庭隅でよく実のなるマンリョウ。実が成るためには、花が咲きます。日当たりのよい南側に植えると、葉焼け等を起こします。

前号で話したように庭木は根から吸い上げた水が、幹を通り枝を通って葉まで届きます。葉では特に葉の裏に多数ある気孔から水分を蒸発させ、この時発生する気化熱で葉の温度を下げて光合成等の生活を行っています。しかし根の生育が悪いと必要量の水分が根から吸収されず、気化熱が確保できずに葉枯れが発生します。

冬の寒い北風によって、庭木の葉を枯らした経験はありませんか。最近は園芸店でいろいろな庭木が販売されています。遠く海外から来た植物まであります。これらの庭木は日本の、関西の気候風土に合ったものもあれば馴染まない庭木もあります。せっかく記念樹として庭に植えた木が、数年で枯れてしまっては大変です。外来樹種を庭に植えるときはくれぐれもその庭木の原産地の気候風土をよく調べ、我が家の庭に合っているかを確認して植栽してください。せっかく植えた庭木に花が咲かない、実が成らないでは困ります。近くの公園や森を散歩されるときに、どのような樹木が生育しているかをよく観察しながら散歩を楽しむことも心掛けてください。新しい発見が必ずあります。

次回からは、庭によく植えられている庭木について話をしていきます。

絵本からのエコ・メッセージ 16 「はなのすきなうし」

KFG会員 畑中弘子
(児童文学者)

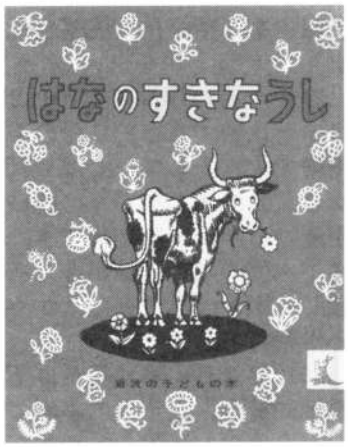
昔、スペインにフェルジナンドという花の好きな子牛がいました。ほかの子牛たちが跳んだりはねたり角をつき合わせ、ケンカをしている中で、フェルジナンドはコルクの木の下にすわって、花のにおいをかいでいます。

大きく成長したフェルジナンドは、ある日うっかり、くまん蜂の上に腰をおろすのです。突然、強い針でチクリ！　あまりの痛さにとびあがり、あばれまわります。

それを、ちょうど闘牛用の牛を探していた牛かいの目にとまりました。すぐフェルジナンドは町につれていかれ、牛たちのあこがれの闘牛デビューを果たします。だが、闘牛場にとびだしたとたん、見物の女の人がつけた花飾りの匂いにうっとり。花の匂いをかいで、その場にすわりこんでしまいます。

戦おうとしないフェルジナンドは元の牧場にもどされることになりました。それからはコルクの木の下にすわって、大好きな花の匂いをかいで静かで平和な日々をおくりました。

あるがままに生きるすばらしさを教えてくれ、エコライフの基本理念をみるようです。白黒で、静と動が見事に描き分けられた挿絵は繊細で美しく、子どもにも大人にも大変人気のある絵本です。



おはなし：マンロー・リーフ
え：ロバート・ローソン
やく：光吉夏弥
岩波書店

黄土高原の植物⑲

クララはハイジの友達ではなかった

－フルス村の苦参－

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

黄土高原の広さ(範囲・面積)は人によって主張が異なる。小は20万㎢から大は63万㎢までの幅がある。いったいどこまでを黄土高原というのだろう。現在最も多く採用されているのは36万～38万㎢説であろう。私は「黄土高原造林学」(中国林業出版社、1997年)という本が結論した38万㎢説を黄土高原としている。最も広い58万～63万㎢説はこの黄土高原にその北のオルドス高原と河套平原を加えたもので、「黄土高原地区」という表現がされる。黄土高原はいわゆる「黄土高原」と「黄土高原地区」という使い分けがされることも多い。

2011年から緑化協力を始めた内モンゴルのフルス村は、オルドス高原にあって、黄土高原の北にすぐ接するマオウス沙地の一角にある。そうするとフルス村は黄土高原でないので、フルス村の植物を取り上げると「黄土高原の植物」シリーズに疑問符がつく。幸いというか、上述のようにフルス村は「黄土高原地区」の一角でもある。ここは一つ大目にみていただき、黄土高原には２つの区分があるという前提のもとでお読みいただきたい。

さて、フルス村の緑化支援地を歩いていると、苦参（中国語発音はクー・シェン）がよく目につく。目立つのである。この植物、日本の野原や土手などにも分布し、名はクララという。多年草で高さは1m前後だが、あの「蘭州市の木」エンジュと同属である。なるほど葉はエンジュとよく似ている。そこでクサエンジュという別名もある。

緑化支援地でなぜこんなにクララが目立つのだろうと疑問に思い、調べてみた。有毒植物だったのである。マトリンというアルカロイドを根に多く含んでいるのである。家畜が食べないため、あるいは飼料として採集しないためにたくさん残っているのである。

マオウス沙地には牛心朴子（ニュー・シン・プー・ズ。ガガイモ科カモメヅル属）という多年草がやたら目立つところがたくさんある。この植物も有毒であり、家畜が食べないために残っているのである。こうした植物が目立つということは、有用な飼料植物が食べつくされて有毒植物だけが残ったことを示している。つまり草原が荒れている証拠である。フルス村も過放牧か何かで土地が荒れてしまったのだろう。

このクララという名前である。最初に聞いたとき、あのアルプスの少女ハイジが思い浮かび、クララとはいい名前だ、と思った。しかしクララの語源は、有毒成分をかじると「頭がくらくらする」からだという。苦参（くじん）という名からは、苦い人参という連想はできる。苦い成分は薬にもなるようで、いろいろ薬用効果があげられている。牛心朴子も薬になる。語源や有毒だと聞いてくらくらしても、長所もあるのである。薬としてだけでなく水土保持にも役に立つ。とはいえ、この植物が目立つのはよくない兆候である。緑化支援の成果はこの植物が目立たなくなったことでも判定できるといえそうだ。

苦参の枝葉、花、豆果
（北隆館「牧野新日本植物図鑑」より）

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹 －住吉山手9期植樹－

●2013年６月８日(土)　下草刈り
　　９月２日(土)　下草刈り
　　９月９日(土)　予備日
●集　合　JR住吉駅南側広場　９時
●服　装　長袖、帽子、運動靴
●持参品　弁当、飲み水、軍手、雨具、タオル

参加できる方は事務局までお知らせ下さい

六甲山クリーンアップ活動

－身近にできることから始めよう－

●日　時　2013年９月16日(土)
●集　合　華僑会館（神戸市中央区）午前10時
●歩　行　約３時間
●コース　活動地を神戸市中央区の背後の再度山ハイキングコースに変更しました。活動は従来通ゴミ・空き缶集めをしながらハイキングを楽しみます。
●持参品　弁当、水筒、雨具、タオル、ごみ入れ用ビニール袋、軍手

最近は参加される方が固定化しています。新しい方の参加をお待ちしています。

第2回 KFG歴史散歩より

11月24日第二回の歴史散歩を神戸市垂水区で開催し古代遺跡を初め近代建築等を見学して歩きました。須磨から垂水にかけての海岸美は「白砂青松」と詠われ、そこに「神意」を汲み取った古来より文学・歴史の舞台として知られた場所です。明治時代以降は大阪・神戸の郊外地の別荘地とし、あるいは行楽地として利用されてきました。1960年代以降の高度経済成長期を迎えると、海岸は埋め立てられ背後の山はベッドタウン地として開発された結果、景観は大きく変容しました。近年は本四架橋が建設され新たな景観を見せています。今は舞子浜公園の松林がかつての面影を留めています。

一方古代の歴史に目を向けると、兵庫県下一の規模を誇る前方後円墳の「五色塚古墳」を初め、僅かではありますが古墳が住宅地の一角に保存されています。前記の舞子浜公園からは五色塚古墳と同時期の埴輪円筒棺が多数発見されています。これは古墳時代の一埋葬方法ですが、その一番の特色は常に波により洗われる恐れのある砂浜に築かれていることです。その意義はまだ解明されていません。「日本書紀」にある「赤石の櫛淵」は当地のこととされています。これは近畿の西限を規定したものですが、ここにその意義の一端があるのではと考えています。

現在、舞子浜公園一帯には「移情閣」・「武藤山治邸」・「木下家住宅」などの近代建築を移築して保存・公開されています。これ近代遺産を観光資源として利用することにより、かつての海水浴場は新たな観光客が訪れるようになっています。大都市神戸市内にもまだまだ、古墳を始め歴史遺産を見つけることができます。次回は東神戸の古墳を訪ねる予定です。

親睦会のご案内

本年度も会員間の親睦を図るために「竹の子狩り」と「マツタケ狩り」を企画しました。

竹の子狩り担当：池田さん

マツタケ狩り担当：村上・三角さん

歴史散歩は昨年度から神戸市とその周辺地の遺跡を中心に散策しています。今年は神戸市灘・東灘区の古墳の見学を予定しています。

＜竹の子狩り＞

●日時：2013年４月29日（月）

＜マツタケ狩り＞

●日時：2013年10月中旬の土・日曜日

ＫＦＧ歴史散歩

●日時：2013年11月２日（土）

●集合：JR灘駅　改札口　午前10時

●コース：灘区 敏馬神社→西求女古墳→東灘区 処女塚古墳→東求女塚古墳

「竹の子狩り・マツタケ狩り」の参加ご希望の方は事前にご連絡ください。歴史散歩は集合場所へ直接お越しください。お問い合わせは事務局まで。

平成12年度植樹ツアーの顛末

昨年の尖閣諸島の領有問題による日中間の紛争は、政治の世界だけでなく多方面にその影響を及ぼしましたが、ＫＦＧの活動もその例から洩れることはできませんでした。

12年度のオトカ前旗での植樹活動は２年目を迎え、昨年植えた木々の生育状況を確かめることも楽しみの一つでした。一方、蘭州市での活動も例年通りの植樹と、ＫＦＧが蘭州市と共同活動開始10周年記念行事に参加することも大きな目的でした。

９月17日、夏以来の中国国内の紛争もやや下火になったこともあり予定通り出発しました。最初の訪問地オトカ前旗のホテルに夜遅く無事到着しました。翌朝はオトカ前旗政府の担当者と今後の事業の協議をすべく準備をしていたのですが、公安局から日本人の安全を確保できない可能性があるのでホテルから出ないようにとの指示が出ました。その直後には蘭州市の指揮部を通じて、甘粛省と蘭州市の外事弁公室から10周年記念シンポを初め植樹活動等の緒行事は中止するように要請が来ました。また指揮部も我々とは接触できないとの連絡が入りました。このため、オトカ・蘭州での植樹はもちろんのこと、今後の打ち合わせも満足にできない状況となり、結局は２日間ホテルから一歩も出ることなく19日に銀川空港から北京経由で関西空港に帰ってきました。今回のツアーには初めて参加された方々もおられました。この方々は植樹を大いに楽しみにしておられたのですが、主催者としては残念な思いで一杯です。

今回は大変残念な結果に成りましたが、我々の植樹活動は地球環境保全が目標であり、住みよい環境を造ることです。今後も国際交流と共に植樹活動を推進して、日本に飛んでくる黄砂を一粒でも少なくするためがんばるつもりです。

2013年度 植樹ワーキングツアーの実施

昨年のツアーは残念な結果になりましたが、今年も例年とおり実施することにしています。

日程は６月中・下旬に、蘭州市とオトカ前旗の二ヶ所の植樹を予定しています。詳細の日程は３月中旬の現地協議の中で決定します。

蘭州市での植樹活動は現在会費と寄付金だけで運営しています。大規模な活動は出来ませんが、ＫＦＧ発足の契機となった事業でもあり、小規模でも末永く継続する事を考えております。皆様のご参加をお願いします。